

MIRAI REPORT

ISSUE. 013

◆ NoMaps釧路・根室2022 高校生ビジネスコンペティションを開催しました！

◆ NoMaps釧路・根室2022 前編

i. 振り返りーNoMaps釧路・根室2022実行委員会 実行委員長 石井一英
《共催事業》プログラミング親子教室の開催ーSociety5.0で生きていく次世代のためにー

ii. カンファレンス1「地域資源エネルギーによる安心なまちづくり」

iii. カンファレンス2「独創と協創。中標津町のこれからについて」

iv. カンファレンス3「養殖事業による新たな水産ブランドの開発～地域産業の視点から～」

v. カンファレンス4「AIを活用した地域の文化、スポーツを展望」

NoMaps 釧路・根室 2022

高校生ビジネスコンペティションを開催しました！

2022年11月15日(火)、中標津町トーヨーグランドホテルにて、NoMaps 釧路・根室 2022 高校生ビジネスコンペティションを現地・オンラインのハイブリッド形式で開催いたしました。

初めての釧路以外での開催、また、3年ぶりのリアル開催を実現することができ、参加生徒・一般あわせて100名以上と多くの方にご来場いただきました。

会場では高校生によるプレゼンテーションが行われ、審査員を目の前に、また制限時間が7分と短くやり直しの利かない緊張感の中、どのチームも活力のみなざる素晴らしい発表を披露してくださり、リハーサルを何度も重ねて来られたことが伝わってきました。

以下、本事業の概要や開催結果をご紹介します。

◎NoMaps 釧路・根室 高校生ビジネスコンペティションとは

釧路・根室管内の高校生がアントレプレナーシップ(起業家精神)を学び、将来のふるさとへ熱い思いを持ちながら、当地域の産業振興、活性化に資するビジネスプランを創造する機会を通じ、もって地域の人材育成を図ることを目的に開催しています。

釧路・根室管内の各高校がチームを作り、現状の課題を解決することで見えてくる新たなビジネス・施策について、ビジネスプランと地方創生プランの2部門に分かれて事前に企画書を作成します。また、当日はプレゼンテーションを行い、8人の審査員による厳正な審査を経て、各賞を授与します。なお、今回につきましては、現地発表のほか、オンラインや事前収録動画での発表も可能としました。

<審査員>

審査員長	クリプトン・フューチャー・メディア株式会社 代表取締役 伊藤 博之 氏
審査員	北海道大学ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点 代表 教授 石井 一英 氏
審査員	北海道教育庁釧路教育局 局長 相川 芳久 氏
審査員	北海道教育庁根室教育局 局長 日向 正明 氏
審査員	北海道教育大学釧路校 キャンパス長 浅利 祐一 氏
審査員	釧路公立大学 地域経済研究センターセンター長 中村 研二 氏
審査員	釧路工業高等専門学校 校長 大塚 友彦 氏
審査員	一般社団法人 Code for Japan 山崎 清昭 氏

◎開催結果

- ・日時 2022年11月15日(火)
- ・会場 中標津トーヨーグランドホテル
- ・発表チーム 10校22チーム118名
(応募数 11校43チーム156名)



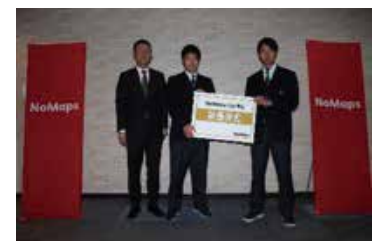
<参加高校>

釧路湖陵高校、釧路商業高校、釧路明輝高校
白糠高校、標茶高校、根室高校、別海高校、中標津農業高校、阿寒高校、弟子屈高校、厚岸翔洋高校

賞	高校名	チーム名	テーマ
最優秀賞	厚岸翔洋高等学校	アメマスチーム	厚岸の水産業をもっと持続可能に
優秀賞	中標津農業高等学校	マネージメント研究班	開校！計根別食育学校in中標津
優秀賞	標茶高等学校	食品ゼミ鹿班	「地域の課題」を「地域の素材」に
みらい賞	釧路湖陵高等学校	ふぁん	働きやすさは創る時代
みらい賞	中標津農業高等学校	肉加工研究班	エゾシカをプロデュース
みらい賞	弟子屈高等学校	バイオガス班	バイオガス発電で外来種駆除
みらい賞	別海高等学校	乳牛研究班	飼料自給率の向上を目指して
審査員特別賞	弟子屈高等学校	ビジネイチャー	アクティビティで地方創生
審査員特別賞	阿寒高等学校	阿寒創生	阿寒町サテライトオフィスチャレンジ ～阿寒に希望を～



最優秀賞に選ばれたのは、厚岸翔洋高等学校 アメマスチームのテーマ 厚岸の水産業をもっと持続可能に です。また、優秀賞には、中標津農業高等学校 マネージメント研究班のテーマ 開校！計根別食育学校 in 中標津と標茶高等学校 食品ゼミ鹿班のテーマ 「地域の課題」を「地域の素材」に の2つが選ばれました。最優秀賞のチームにはクリプトン・フューチャー・メディア株式会社の企業訪問ツアーが贈られたほか、上位9チームに釧路市名産品のふき紙を使用した賞状と各種副賞が授与されました。また、その他の参加チーム全てに奨励賞として図書カードが贈られました。



最優秀賞 厚岸翔洋高等学校 アメマスチーム

テーマ「厚岸の水産業をもっと持続可能に」～未利用・低利用魚の有効活用を通して～

◎プラン概要

厚岸で漁獲される未利用・低利用魚（アメマス・ムロランギンボ等）の有効活用方法を確立することで市場価値を高め、水産業従事者の収入増および SDGs への貢献を通じた厚岸の水産業全体のイメージアップ、リブランディングを図る。

◎具体的な施策

- ・水産加工会社や研究機関と連携した活用方法の研究、商品開発（今年度はアメマスを用いた揚げかまぼこを開発）
- ・開発商品の水産エコラベル認証（MEL ジャパン等）、見本市の出展、日本水産学会等での発表
- ・地産地消をベースとした販路開拓（地域の小中学校給食等）
- ・動画配信サイトの活用を通じたイメージ戦略・新規就労者の呼び込み

◎今後の展望

- ・「持続可能な水産業」のモデル地域・厚岸として、日本や世界をリードしていく
- ・現在の「少品目大量生産・高度流通」から、「多品目少量生産・地産地消」へと水産物の生産構造が変化し、多種多様な魚種がそれぞれの土地で食べられる豊かな魚食文化を厚岸発信で広げていく
- ・水産業が時代最先端の産業として捉えられ、活力とアイデアに満ちた若者が参入してくる

NoMaps 釧路・根室 2022

2022. 11/15(土) - 17(日)

テーマ

「次世代へつなぐ地域デザイン力を共創する」

NoMaps 釧路・根室 2022 を振り返って—実行委員長総括

高校生ビジネスコンペティションから始まった NoMaps 釧路・根室 2022 は、久々の対面開催 (+ オンライン) ということもあり、熱気に包まれたまま 9 つのカンファレンスを通して無事終了しました。釧路以外で初の中標津開催となった NoMaps 釧路・根室 2022 では、新たに北大リサーチ&ビジネスパーク (ノーステック財団) が共催に、さらに株式会社 NTT データ北海道には協賛として加わっていただき、関係者が増えるばかりです。実行委員会の皆様を始め、協賛団体、協力団体、後援団体の皆様に、改めてご協力を頂きましてありがとうございました。

今回の NoMaps 釧路・根室 2022 のタイトルは、「次世代へつなぐ地域デザイン力を共創する」とさせていただきます。次世代に向けて、何か役に立つことを、この地域から、皆で共創しよう、そしてできればその過程をデザイン力として蓄え、またこのデザイン力自体を共創していく仕組みを地域に根付かせよう」という思いがありました。来年度に向かって、すでに準備を開始しているところです。なんとと言っても NoMaps 釧路・根室の売りは、特色ある多様なカンファレンスです。皆様のアイデア、企画、要望、紹介あつてのカンファレンスです。これまでの人のつながりを大切に、そして今後の新たなつながりのために、引き続きご協力・ご参加のほどよろしくお願い申し上げます。

NoMaps 釧路・根室 2022 実行委員長 石井一英

▶NoMaps 釧路・根室とは

「NoMaps」は、北海道という象徴的な開拓の地で、クリエイティブな発想や技術によって次の社会を作ろうとする現代的フロンティアスピリットを持った人たちのためのコンベンション「人、情報、知識、物などの交流の場」。2016年に札幌で始まり、2019年からは釧路・根室地域の価値創造をテーマに「NoMaps 釧路・根室」として毎年開催している。



公式 HP

<https://nomaps-kushiro-nemuro.com/>

《共催事業》プログラミング親子教室の開催—Society5.0 で生きていく次世代のために—

■2022年12月17日(土) 9:00～12:00(午前の部) / 13:30～16:00(午後の部)

■場所：釧路市立春採中学校 2階コンピュータ室

本事業は、子どもたちが自ら創造的に考え、体系的に理由付けし、協働して活動するといった、今日の社会で必要とされるスキルを学ぶための学習環境に親子で触れることのできる機会を設けることを目的に開催されています。教室では世界最大の子どもの向けプログラミングツール「Scratch」を利用し、親子で楽しめるブロック崩しゲームを作成しました。

子どもたちが講師の指導を受けながらゲームの作成に取り組む間、別室で父母向けに、これからの Society5.0 の時代で活躍できる人材育成の必要性について、一般社団法人学校地域協働センターラポールくしろの幸村代表理事よりお話がありました。その中で、子世代だけでなく、まずは親世代が変遷していく時代を理解し、次世代の育成に繋げていくことが大切だということを改めて伝えていただきました。

主催：一般社団法人学校地域協働センターラポールくしろ 共催：NoMaps 釧路・根室 2022
後援：釧路 IT クラスタ推進協会 協力：合同会社 Realidea



Scratch とは

<https://scratch.mit.edu/about>

NoMaps 釧路・根室 2022

11/16^{WED} 11:00-12:00
ウエディングプラザ寿宴/オンライン配信

Conference 1

地域資源エネルギーによる 安心なまちづくり



パネラー

阿寒農業協同組合
地域対策室 室長

田中 義幸

北海道大学大学院工学研究院
附属エネルギー・マテリアル
融合領域研究センター 准教授

能村 貴宏

古河電気工業株式会社 研究開発本部
サステナブルテクノロジー研究所 領域育成部長 兼
地産地承エネルギー プロジェクトチーム 開発部長

福嶋 将行

モデレーター

北海道大学ロバスト農林水産工学
国際連携研究教育拠点 代表

石井 一英

地域資源を利用した再生エネルギーの構築、さらに地域で生産したエネルギーを地域で流通・消費し、カーボンニュートラルの実現を目指したコミュニティをテーマに、ディスカッションを展開していただきました。

いしい かずえい
モデレーター 石井 一英 氏
北海道大学ロバスト農林水産工学
国際連携研究教育拠点 代表

たなか よしゆき
パネラー 田中 義幸 氏
阿寒農業協同組合 地域対策室 室長

北海道大学では、JST「共創の場形成支援事業」において、「自然と私たちが育む安心コミュニティ」の実現を目指すプロジェクトに取り組んでいます。その中で目指すのが、自然と人間活動のバランスを探求し、見直すことのできる「しん・1次参業人」の創造です。「しん」には新・真・心といった多くの意味を込め、「1次」はすべてが自然から始まっていることを表現しています。また、あえて「産業」ではなく「参業」とし、地域の人々を巻き込む、参集できる人という意味を持たせています。この「しん・1次参業人」を育成するべく、釧路市を中心に循環型社会システム構築の実証に取り組んでいます。ここでは、エネルギー循環に焦点を絞り、バイオガスや地熱といった釧路・根室地域の豊富な未利用資源の有効活用を目指す地域の取り組みを皆様に紹介していただきました。

酪農業の課題として、酪農家のエネルギー使用量や堆肥センターのふん尿処理能力、生産現場の悪臭・地下水汚染等が挙げられます。JA阿寒では、これらの課題を解決するべく、大きく2つの取り組みを実施しています。1つ目の「酪農地域自立システム実証事業」(NEDO)では、バイオガスプラントを新たに建設し、家畜ふん尿由来のバイオガスエネルギーを農畜産物生産及び地域活性化に利用する、酪農地域におけるエネルギーの地産地消システムの確立を目指して取り組んでいます。また2つ目の「釧路市阿寒町地域マイクログリッド構築事業」(経済産業省)では、バイオガスや太陽光といった地産エネルギーを災害時に阿寒エリアの酪農施設・民家等に供給する地域マイクログリッドの構築を目指し、様々な企業と連携し取り組みを進めています。この事業を通じて生まれた地域住民・企業とのネットワークを活かすことで、阿寒地域のさらなる振興を目指していきます。

ふくしま まさゆき

パネラー 福嶋 将行 氏

古河電気工業株式会社 研究開発本部
サステナブルテクノロジー研究所 領域育成部長 兼
地産地承エネルギープロジェクトチーム 開発部長

のむら たかひろ

パネラー 能村 貴宏 氏

北海道大学大学院工学研究院附属
エネルギー・マテリアル融合領域研究センター
准教授

弊社は、社会課題を価値に変える新たな社会基盤を実現するために、家畜のふん尿から新たなエネルギーを創出する技術を開発しています。温室効果ガスの原因となっている家畜ふん尿から LP ガスを合成し、自然災害時に活用します。温室効果ガスをエネルギー化するには触媒反応を起こす必要があります、この時に用いる「触媒」が鍵となります。そこで弊社は「ラムネ触媒」という安価かつ高活性・高寿命な触媒を北海道大学と共同研究・開発し、活用を進めています。

市場規模でいうと、1 頭分のふん尿からは年間約 2.3 万円の LP ガス生産、CO₂削減量で約 200 kg / 年の計算になります。国内 130 万頭分では年間約 307 億円、CO₂削減量で約 30 万 t、世界 1 億 4,000 万頭分では年間約 3.3 兆円、CO₂削減量で約 3,000 万 t と、非常に大きな規模であることが分かります。

当社は、家畜ふん尿を原料とするエネルギー生産を通じて、地域に新たな産業を生み出し、社会基盤を創る一助を担う存在でありたいと考えています。

それぞれの地域が特徴を活かした町づくりに貢献するために、これからも当社は取り組みを進めて参ります。

私からは、現在行っている蓄熱技術の研究についてご紹介します。

全世界のエネルギーのうち、約 51%が最終的に加熱・冷却用として消費されています。そこで、蓄熱技術により熱の利用可能性を広げられないかと考え、研究・開発を進めています。

熱は通常、受け入れるシステムが無ければ廃熱として捨てられてしまいますが、貯蓄・運搬し使用するシステムがあれば、廃熱を有効活用することができます。

私たちは現在、新たな蓄熱材「h-MEPCM」を研究・開発しています。この蓄熱材はさらさらとしたセラミック粒子状で、様々な形に加工することにより、どんな熱源にも対応可能です。この技術を活かすことで、産業排熱の回収・再利用や、太陽の熱を昼間に蓄え夜間に放出し、熱エネルギーの効率化を図る等、様々な場面の応用が可能であると考えています。これからも、蓄熱・熱輸送システムの技術力と利便性を向上させることで、新たな産業・まちづくりに貢献していきたいです。

NoMaps 釧路・根室 2022

11/16 WED 13:00-14:00
ウエディングプラザ寿宴 / オンライン配信

Conference 2

独創と協創。

中標津町のこれからについて



パネラー

中標津町役場建設水道部
都市住宅課 課長

佐瀬 光史

DJ

塩崎 一貴

しべつ未来塾
副代表

高井 歩美

モデレーター

アエンダラブ合同会社
代表

清水 たつや

幅広い分野でその活用が期待される AI。地域における文化芸術の活動やスポーツなど、AI を使用した様々な事例をもとに、地元事業者に専門家を加えて、さらなる AI 活用による地域活性化の可能性の展望についてディスカッションしていただきました。

しみず
モデレーター 清水 たつや 氏
アエンダラブ合同会社 代表

させ ひろふみ
パネラー 佐瀬 光史 氏
中標津町役場 建設水道部
都市住宅課 課長

私は釧路市出身の釧路町在住で、地元を中心としたまちづくりにかかわる活動に携わっています。アエンダラブ合同会社は、まちづくりを軸にしたプラットフォームカンパニーとして立ちあげました。

まちづくりの前提として、賑わいの無いところに経済は生まれませんので、2022年9月、フィッシャーマンズワーフ MOO 2 階にオープンした「港まちベース 946BANYA」をはじめとしたコミュニティスペースの運営にも関わっています。そうした交流の場を活用し、地域で活躍する人々を集めた交流イベントや地元の大学生によるまちづくりワークショップ、まち歩き等、賑わいに繋がる事業を実施しています。

今回のテーマは、中標津町のまちづくりということで、釧路のまちづくりに携わる私の視点から比較等も交えつつ、中標津町のこれからについて、トークセッションを展開できたらと思っています。

「中標津町都市計画マスタープラン（通称：都市マス）」では、町の“ツボ”となる取り組みを7つ掲げ、そこから5つに絞り、行政や企業を巻き込みながら取り組んでいます。そのうちの1つ目として取り組んだのが「まちなか」を刺激する取り組みです。具体的には、町中心部のしるべっ広場を町民で賑わう交流の場にするべく、「ひろばカフェ」という名称で、牧草ロールを主役にしたイベントを開催しました。子供連れを中心とした約2,000人に来場いただき、大盛況に終えることができました。塩崎さんや高井さんをはじめ、多くの町民、団体の皆様に関わっていただき、改めて、人と人同士の繋がりや対話の重要性を実感しました。地域の人・団体同士の繋がりだけでなく、役場内のヨコの連携も強化しつつ、町民の皆様が満足していただけるようなまちづくりを目指していきます。

パネラー しおざき かずたか
塩崎一貴 氏
DJ

パネラー たかい あゆみ
高井歩美 氏
しべつ未来塾 副代表

私が中標津町のまちづくりに関わるようになったきっかけは、町内のゲストハウス「ushiyado」で開催されていた「雑談ラウンジ」という交流イベントで、役場の佐瀬さんに声をかけていただいたことです。やりますと返事をしたのは、DJとして活動し、どの団体にも属していないフリーの立場で、どこまで町政に食い込んでいけるか、という自分へのチャレンジの意図もありました。

中標津町では、一般人が町政に関わる機会も増えています。町民会議には「町民ファシリテーター」という役割のメンバーが置かれていて、参加者の意見を上手にまとめてくれるので、誰でも参加しやすい温かな雰囲気があります。

ただ、町政すべてに一般人が関わる必要は無く、それよりも、町民参加のハードルを下げるの方がもっと大切だと思っています。まちづくりに関わる町民の数を増やしていけるよう、コミュニティ形成や対話をこれからも大切にしていきたいです。

私も塩崎さんと同じく、「雑談ラウンジ」で佐瀬さんに声をかけていただいたご縁で、まちづくりに携わり始めました。「しべつ未来塾」の副代表として標津町のまちづくりに携わりながら、私の地元である中標津町のまちづくりへの関わりをもっと増やしたいという想いをずっと持っていました。そんな中、中標津町の「都市マス」が町民参加型である点に惹かれ、携わることを決意しました。

まちづくりというと、何か企画したり、計画書を書いたりしなければならない、堅苦しいものというイメージを持っている人もいるかもしれませんが、そうではなく、自分の住む町がこんな風になってほしいというイメージを描きながら自分が楽しいと思えることをやって、あとからそれが実はまちづくりに繋がっていたことに気づくくらいの、もっと気軽なものであってほしいと思っています。

NoMaps 釧路・根室 2022

11/16^{WED} 14:30-15:30
ウエディングプラザ寿宴 / オンライン配信

Conference 3

養殖事業による

新たな水産ブランドの開発

～地域産業の視点から～



パネラー

北海道大学大学院
水産科学研究院 助教

高橋 勇樹

ニチモウ株
海洋事業本部養殖開発室
室長

戸川 富喜

釧路市漁業協同組合
指導部 部長

坂 拓成

モデレーター

国立研究開発法人
水産研究・教育機構
研究員

町口 裕二

釧路、根室地域の基幹産業である水産が低迷する中、新たな水産ブランド構築に向け、陸上養殖を含めた地域で取組む養殖事業の開発について検討していただきました。

まちくち ゆうじ
モデレーター 町口 裕二 氏
国立研究開発法人 水産研究・教育機構
研究員

さか たくまさ
パネラー 坂 拓成 氏
釧路市漁業協同組合
指導部 部長

水産業は、全国的に生産量・金額ともに減少しています。水産王国である北海道、その中でも道東地域は特に、赤潮被害やサケ・サンマの不漁、国際関係の悪化等の影響を受け、より顕著な経済打撃を受けています。

この厳しい現状を打開する可能性の一つとして、養殖業に期待がかかっています。国でも「養殖業成長産業化総合戦略」を策定し、養殖業を成長産業にしようという動きが強まっています。

大きな期待がかけられている養殖業ですが、地域ごとの対象種や技術の確立、担い手、採算、ブランド化等々、まだまだハードルは高いのが現状です。

この回では、釧路・根室地域における養殖業への期待と現状、将来性について、第一線で取り組まれている方々と一緒に考えてみたいと思います。

釧路市漁業協同組合は、古くから漁船漁業を主体に営んでおります。沿岸漁業は盛漁期が8月後半12月と短く、半分以上が閑散期です。そのため細々としてきたのが実状です。そこで、沿岸漁業に代わる事業として期待されたのが養殖です。しかし、過去にギンザケ養殖に失敗した事例があり、やらなければならないとは言われつつ、出来ないまま数十年経過してしまいました。そんな中、今年になってニチモウ株式会社様からお声がけをいただき、新たにギンザケ養殖の実証実験をスタートさせることができ、養殖事業に一筋の光が見えた気がしました。

今後については、他の漁協とも連携しつつ、将来の世代へ残せる漁業として、事業化出来ることを期待しています。

とがわ とみよし
パネラー 戸川 富喜 氏
ニチモウ株式会社
海洋事業本部 養殖開発室 室長

たかはし ゆうき
パネラー 高橋 勇樹 氏
北海道大学大学院
水産科学研究院 助教

日本国内のサケ科魚類の養殖はギンザケが主流で、西日本を中心に全国各地でご当地サーモンが生産されています。北海道でも過去にサケ科魚類を養殖した事例がありますが、いずれも管理費や疫病の問題、輸入サケマスや道外産ギンザケとの価格競争により採算性が確保できず、衰退してしまいました。

そんな中、温暖化により日本近海の海面水温が年々上昇していることが問題視されています。サーモンは水温が 20℃を超えると死んでしまうので、水温次第では夏を越せなくなってしまいます。一方で、釧路・根室地域は夏場でも水温が 20℃以下という冷涼な気候が強みです。他地域が出荷できない時期にサーモンを出荷すれば、競争力を高められる可能性があります。また、この地域には、陸上養殖を行う場合大量に必要な水資源や高度な技術を持つ加工会社、養殖魚の餌の主原料である魚粉の製造工場など、養殖に必要な資源が豊富にそろっています。養殖はすぐに儲かるものでもなく、事業として軌道に乗せるのは簡単なことではありません。茨の道を進む覚悟を持ちつつも、積極的な姿勢で養殖業にチャレンジして欲しいと思います。

当研究室では、養殖事業をサポートするシミュレータの開発を行っています。養殖システムを検証するうえで、実際に飼育実験を行うとなると時間やコスト、飼育担当者の経験値が必要になりますが、養殖シミュレータを用いた仮想空間上の実験なら、短時間・低コストかつ収益性も検証可能です。養殖シミュレータでは、飼育個体数や水槽のサイズ・形状、水温、給餌方法等の条件を任意で設定・試行し、成長量を予測できます。具体的な活用例としては、給餌量の最適化が挙げられます。養殖業においては餌代がコストの約 6 割を占めます。そこで、将来利益を最大にする給餌量をシミュレータによって算出することができます。

また、シミュレータを応用すれば、新たに養殖業を始める際、収益が最大になる養殖システムを事前予測することも可能です。地域水温や面積等、地域ごとの地理的条件に応じた最適な養殖システムを構築することで、地域での食料生産にも貢献したいと考えています。

NoMaps 釧路・根室 2022

11/16^{Wed} 16:00-17:00
ウエディングプラザ寿宴/オンライン配信

Conference 4

AIを活用した地域の文化、 スポーツを展望



パネラー

東京大学次世代知能科学研究センター 教授

松原 仁

北見工業大学情報通信系/
冬季スポーツ科学研究
推進センター 教授

梶井 文人

株式会社シカホールディングス 代表

兒玉 拓巳

モデレーター

株式会社トーチ 代表

佐野 和哉

幅広い分野でその活用が期待されるAI。地域における文化芸術の活動やスポーツなど、AIを使用した様々な事例をもとに、地元事業者に専門家を加えて、さらなるAI活用による地域活性化の可能性の展望についてディスカッションしていただきました。

さの かずや
モデレーター 佐野 和哉 氏
株式会社トーチ 代表

まつばらひとし
パネラー 松原 仁 氏
東京大学
次世代知能科学研究センター 教授

私の地元は遠軽町で、現在は株式会社トーチの代表として、札幌市に拠点を置いて活動しています。

この道東地域には、AI×地域×文化芸術、AI×地域×スポーツといった、AIを応用した取り組み事例がいくつか存在します。

今後、地域でさらにAIを活用していくには、どのようなことが重要になってくるのでしょうか。また、釧路・根室地域で文化芸術、スポーツとAIと掛け合わせることで、今後どのようなことができるのでしょうか。例えばスポーツに着目すると、この地域を代表するスポーツといえばアイスホッケーが真っ先に思い浮かびます。そうした地域の特色を活かしつつ、どういったAIの活用可能性があるかについても、検討していきたいと思っています。

私は主に、コンピューターによる芸術作品の自動生成の研究を行っています。具体的な事例としては、手塚治虫が描くキャラクターをAIに学習させて新たなマンガ作品を創作させる「Tezuka 2020 プロジェクト」があります。

地域におけるAIの活用を考えたとき、まずはその地域に事業拠点を置き、地元との連携を強化することが望ましいと考えます。例えば、道東地域にゆかりのある作家の1人として、浜中町出身でルパン三世の生みの親・モンキーパンチ氏がいます。仮に、手塚治虫と同様、彼の新作をAIで創作したとします。そこで使用許諾等の権利問題になっても、地元がバックに付いていれば何かと話をスムーズに進めやすいでしょう。また、そうした創作作品を国内外に広く発信することで、聖地巡礼のようなコンテンツツーリズムと結びつけ、地域の観光需要の喚起にも繋げられるかもしれません。

ルパン三世以外にも、釧路・根室には地域に深く根ざしている文化・芸術作品がいくつも存在し

ます。そうしたものに AI で付加価値を付けることが、すなわち地域、文化、AI を結び付けることに繋がるのではないかと思います。

パネルラー ^{ますい ふみと} 榊井 文人 氏
北見工業大学 情報通信系 / 冬季スポーツ科学
研究推進センター 教授

私は、北見市の代表スポーツ・カーリングの研究を行っています。大学隣に 2020 年建設された最新鋭カーリングホール「アルゴグラフィックス北見カーリングホール」は世界初の分析設備併設ホールであり、実験やトレーニング支援を行う施設としての役割だけでなく、産学官・若者を結び付ける広域連携の拠点として活用する取り組みが進められています。

地域との関わりという点では、特別講演や公開実験を通じて研究活動を地域に公開したり、カーリング支援を目的に地域自治体・組織と包括連携を結ぶ等、地域の人々に広くカーリングを楽しんでもらうために活動しています。

また、道東地域で当研究の応用を考えたとき、カーリングに限らず、例えばアイスホッケーであっても同様の研究は十分可能だと思われれます。冬季オリンピックの札幌開催の話題も出ている中、北海道全体で冬季スポーツの機運を高めるためにも、地域同士が協力し合って何か取り組めたら良いなと思います。

パネルラー ^{こだま たくみ} 児玉 拓巳 氏
株式会社シカホールディングス
代表

当社は、釧路を拠点に、脳波を AI で分析して人の意思を抽出する研究用脳波計の販売とシステム構築を行っています。

開業当初は、地域の事業者にも AI の話をしても懐疑心を持たれがちでしたが、人口減少の激しいこの釧路地域だからこそ、人手不足を解消するために AI の力が必要だという思いが強くなりました。そこで、AI を身近に感じてもらうべく、“身近な『モノ』を使う”、“身近な『コト』に寄せる”、“身近な『ヒト』がやる”の 3 つの手を使おうと考えました。これまでの取り組みとして、釧路市民にとって身近な存在の「シカ」が飛び出してくる、脳波で操作するカーシミュレーションゲームの開発や、AI を使ったプロダクト展示会の開催、また、地元の高専生と連携したイベントの実施等があります。


今後取り組みたいこととして、鹿の食害対策や交通事故対策等、「シカ」に関係する研究をもっと深めてみたいと思っています。社名に「シカ」が入っているのにも関わらず、これまで研究してこなかった分野なので、現在、基礎調査から始めているところです。

これからも、地域の身近な文化から、釧路の方々と AI の間にある壁を徐々に取り払っていけたら良いなと考えています。



2022.12

MIRAI REPORT ISSUE.013

 **大地**みらい信用金庫 地域みらい創造センター